

透視像

ラ・クンパルシータ

太田 伶

介護老人保健施設に入所中の老人、項部の接触性皮膚炎で診察、その元凶は首に巻いた手拭のようで、それは海軍の手旗信号練習以来の習慣のよしであった。

ところで先生、戦時中とは問うから、幸い兵役は免れたが例の学徒出陣式では鉄砲かついで神宮球場を行進したと言ったら、私もですと言う。何だか同志に逢ったような気分になった。学生時代に神田など歩きましたかと問うので、あの頃神田には名曲喫茶などあつてと答えたら、その老人はニッコリして「私はタンゴが好きで日大の学生の頃、タンゴ喫茶に入り浸りだった」と言う。そしてすぐにラ・クンパルシータの名前が出た。

「そういえば映画がありましたナ」と彼。「歴史は夜作られる」と私。得たりや応と「何とかいう女優で」「ジーンアーサー」

そんで相槌をうち「相手の男優はエート」「シャルル・ボワイエ」と私は

答えながら、すっかり忘れていたその映画の一場面を思い出した。船の中のダイニングルームで、ジーンアーサーがハイヒールを脱ぎ捨て、素足になってボワイエとダンスを踊る名場面である。その時の音楽がラ・クンパルシータであったのだ。今どき「歴史は夜作られる」という映画のあつたことなど誰も知らないであろう。クンパルシータでさえ、今どきの人には怪しいのだ。私はますます「その老人に親近感を覚えた。ましてや老健のような施設でそのような老人に逢えるとは、まこと夢のようであった。

というわけで話はますます弾んだ。菊池寛の話なども出て「恩讐の彼方に」は最高ですなども言う。そして又、最高といえはラ・クンパルシータです、と今度はほとんど涙を流さんばかりであった。ところで映画がと再びである。しかもそのとき、先刻話したばかりのアーサーとボワイエの名前を私に尋ねた。その時やつと私は、その老人がかなりの痴呆症であることに気付いたのであった。

編集後記

(α)

陶先生の「五百田家の三兄弟」文中に、(注) 医芸 38 卷 11 月文芸特集号」とあった。16 年前である。なにか? と合本を取り出し驚いたのは当時の執筆者群。参考までに 114 頁の執筆者一覧の下段に

載せた。現況を嘆いていたところに、小川再治・昭子ご夫妻の寄稿の申し出には感謝だった。また、佐伯祐三をこよなく愛する白矢先生が作品の真贋論争に一石を投じる評論、松本清張に『真贋の森』や『美の虚像』があるが、迷路を切り拓いて行く筋道が興味深い。続編が楽しみ。天瀬先生は本当に多忙な中で戯曲。個人的なことだが主人公と一度だけ宴席をともにした経験がある。その天瀬先生に声をかけられて村山先生が医学生時代に住んでいた荻窪清水町界隈を書かれた。こちらも編集者の生活圏内。あの道この道……そうだったのかと感慨深い。浜名先生の長編が完結、山田先生の連載はいよいよ佳境、一挙百枚超の力作でした。